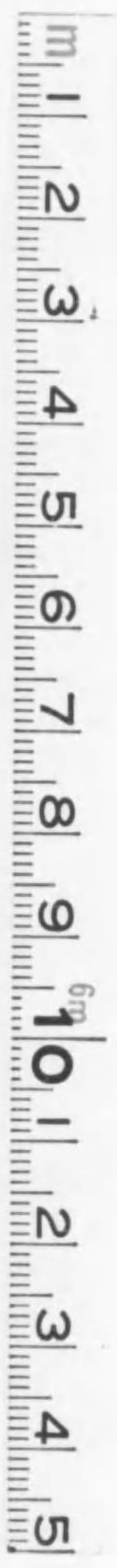




特279-14
1200601101904

考古圖集

26



14

始





I 種

W



1200601101904

考古圖集解説 第二十六集

磚佛號 (第一)

本集には世に磚佛と稱せらるゝもの、中の典型的のものを集めたり。磚佛は本集を以て盡されしに非ず、將來第二・第三と號を追うて博く之を採録し、更に範圍を佛像以外にひろげ、磚を以てせる美術品を集むべき豫定あり。

磚佛については高橋健自氏の高説あり。(考古界五ノ一)津田敬武氏之を祖述して更に附説せらるゝあり。(同氏著「釋迦像之研究」)之を説き盡せるに似たり。今その大略を記さんか。磚佛即ち磚製佛像は磚面に半肉に佛像を現したるもの稱なり。其の用途を等しうせしか否かを斷言し難きも、支那にあつては「善業泥」の名を以て知られ、隋唐の間に行はれしが如く、我にあつては大和を最とし、美濃・三河等の外に之が発見を傳へらるゝなきが如く、大和にあつても、壺坂・橘・定林・山田等の數寺即ち、所謂飛鳥京の地域附近に限るに過ぎず、之が使用年代は所謂奈良前期にありとせらる。支那・日本のを通じて、土を焼いて作りしもの、其の多くは型抜きなりしならん。本集にその型の一なるべしと推せらるものをのせたり。外形は長方形と蓮瓣形の二型式多きを占むるが如く、その大きに至ては、258版の如き

(57)

第二十六集 解説

を大なるものとし、小なるものに至ては、256版の圖の如く、縦横共に約一寸のものもあり、之が用途については、直に斷定すべからざるものあり。前記高橋氏は、之を堂塔内の壁面の裝飾に用ゐられしこと、かの法隆寺金堂壁畫と同じ意味のものなるべしとせられたり。磚佛を見て直に聯想せらるゝは、金銅押出佛にして、更に長谷寺藏銅板千佛多寶塔なり。我が磚佛が壁間の裝飾に用ゐられしものとするも、同時に之に伴うて、その大小各型式が或る體系に歸められ、一種の思想を具象し、よしや之を本尊とせざるも、之によつて寺塔の莊嚴を増せしものあるべきを思ふ。支那にあつても、石窟寺の壁面にこの種の磚佛の嵌入せらるゝあり、同一意義なりしが如し、されど善業泥は善業の爲め、之を寺院に捧げしもありしなるべく、或は護摩佛の如く、寺院より交付を受けしものもありしならん。之を要するに、發見當時の事情の明かならざる今日には、如上の假説を以て満足せざるべからず、事はさまれ、よしや型抜きにもせよ、その製作の頗る優秀なるものあり、造像藝術の貴重な遺品として之を注意すべき必要あるを思ふ。

(251) 磚佛像

大和靈山寺藏にして今は奈良帝室博物館に出陳せらる。

橋寺發見のものなるべし。これに殆ん同一の型を用ひしかと推せらるゝもの、橋寺壺坂寺より發見せられたり。(漸次之を紹介すべし)共に表面に釋迦三尊を現せり。釋迦像は中央にあつて床坐に倚り、脇侍の菩薩左右に立ち、三尊共に蓮坐の上であり、何れも頭後に圓光を有し、この種高橋氏藏品について見るに風貌溫和にして姿勢端正なり、衣は薄く、之を透して殆ん肉體の見ゆる觀あるは、之をグプタ式の手法を追へるものなることを知らしむ。蓮座は各葉を有し、左右のは均齊に小葉を附す。上部には本尊の上に天蓋あり。その左右にあるは菩提樹なるべし。更に其の左右兩隅に當りて舞ひ下れる天人一對あり。製作頗る優秀なるものありといふべし。

252 磚佛像

色赤褐、蓮瓣形、即ち上部は寶珠形を成せり、若し完全ならむには、縦八寸四分、横六寸九分程なるべく、厚さ八寸餘あり、周圍には厚さ約二分深さ二分の輪廓あり、内には前者と同じく釋迦三尊佛を現せり、手法稍、勁健の趣あり、木尊頭上にかゝれる天蓋の如きも自ら崇高の風あり、共に全面に現せる火焰の鈎合を保ちて、その間の調和を得たり。

(253) 善業泥

裏面に「善業泥」とあるを以て一般に善業泥と稱せらる。圖版向つて左は注々見る型式にして、釋迦三尊を現せり。佛像の手法に見て、グプタ藝術の影響を見るべし。現存部高さ四寸三分・底幅三寸四分六厘、向つて右は佛立像を現し、周圍に虎龍を現せり。高さ四寸八分・底幅三寸一分。

254 磚佛像

(1)は高橋健白氏の珍藏せらるゝ優品にして、(2)(3)(4)は共に東京帝室博物館藏品なり。(1)は大和壺坂寺境内より發見せられしもの、高二寸一分、横一寸六分、厚さ三分餘、圖版は之を大體實大にて示せり。中央には獅子座に倚り、與願印を結べる釋迦像あり、兩足を二個の蓮座上に安ず、蓮座は各葉あり、寫實的の葉をもつけたり、その左右上に獅子像一對あり、障屏の上肩部左右には、二個の象頭を刻み、その下部にはまた左右に外方に向つて跳ね揚らんせせる一對の獅子あり、流暢なる唐草はこれらを繞り、左右上端には雲あり。手法頗る秀れしものあり、蓋し磚佛中の白眉といふも不可なかるべし。殊にその獅子座は平子鐸嶺氏がか

つて獅子座 Shihhsana について(考古界五ノ九なる論文中に詳述せられしもの、平子氏は Chihwahle 氏の説を紹介して、之を印度特有のもの、かのガンダーラ式の佛像に於いて斷じて見るを得べからざるものみなし、これが遺品を支那に於て全く求むべからざるに、遠く地を隔てこの磚像に見ることを得て、以て印度的獅子座の意匠の東流を察知し得べしと説かれたり。

- (2)は支那發掘、右手に錫杖を持つ。長二寸・幅一寸四分。(3)は支那西安府薦福寺にありしもの、釋迦坐像なるべし。長さ二寸・幅一寸四分。(4)も同じく薦福寺にありしものといふ。觀音立像なるべし。長二寸二分六厘・幅一寸四分四厘。

(255) 磚佛像

圖版向つて左は、橋寺發見にかゝり、色は普通の瓦の如くにして、他の諸種と同じからず、蓮瓣形をなし、上端稍鋭角をなせり。横三寸一分、縦完全ならば四寸五六分もあらんか。表面には同じく三尊佛と天蓋を現したれど、佛像の形態多少簡古のころあり、天蓋も光背もまた他のものミ異なり、天蓋の兩端は一轉して花形となり、光背は寶珠形を成せり。而して著しく他ミ異なりたるころは、

これらの圖形は何れも突出せずして、反對に沈み入り、かつ佛像が偏體左肩なるに見て、これを磚佛の型と見るべきなり。向つて右は、支那西安府發見のもの、壁龕内に釋迦坐像を安けり。かゝる型式のもの、亦珍し。高三寸六分。

(256) 磚佛像

小形のもの、みを集めたり。(1)は釋迦坐像にして左右に蓮花を配せり。灰色を帯ぶ。長さ一寸七分三厘・幅一寸四分。(2)は殘缺にして、元來は一枚を四區に劃し、各區に一の佛像を安きしもの、如し。佛像は釋迦坐像にして光背・天蓋を附けたり。殘存部高二寸。大和山田寺舊址より發見。(3)は表面に形の類れし佛立像を安き、兩側に雲を配せり。長一寸七分四厘・幅一寸六分四厘、右下に「弟子沙門」銘あり、左下のもは解讀すべからず。裏面に「印度佛像大唐蘇常侍等共作」銘あり。(4)は釋迦坐像なるべし。左右に塔あり。長さ一寸六分六厘・幅一寸二分。1は支那西安府發見、(4)は支那西安府薦福寺にありしものなり。(5)は大和山田寺發見のもの、縦横共に一寸、厚さ僅に一分餘に過ぎず。磚佛にしてかくの如く小なるは實に稀世の珍といふべし。表面に蓮座の上に釋迦の坐像を現せり。

(257) 禪佛像

(1)は山田寺址發見、色赤褐、縦三寸二分・横一寸九分五厘。(2)はその手法略ほ(1)に似たり。四區に分ち、各々に佛坐像を安き、天蓋を附せり。縦二寸四分・横一寸二分。(3)は山田寺址發見、色赤褐なれども、表面は頗る黒味を帯びたり。一區劃の完全なるところにて測るに、縦一寸九分五厘・横一寸二分・厚さ四分餘あり。光背・天蓋等精巧なるものあり。以上の(1)(2)(3)共に高橋健自氏藏。(4)は支那西安府薦福寺にありしもの、東京帝室博物館藏品たり。釋迦三尊を安く、天蓋等形類れたり。上下に凸起あるは、之を壁間に挿入せし爲めのものか。幅一寸六分・長凸起をこめて二寸三分八厘。

(258) 禪佛像

佛坐像にして大形なり。蓮座上に結跏趺坐せり。周圍を缺失せるは憾むべし。高さ六寸七分、大和紀寺畑發掘なり。

(259) 鳳凰磚(國寶)

大和南法華寺所藏のもの、磚佛は直接に用途相似たり

こはなすべからざるも、恐らく寺塔等の壁間の裝飾たりしならん。鳳凰の手法非凡といふべし。

(260) 天女磚(國寶)

岡寺所藏のもの、前者と並べて磚に現はされたる美術品の優秀のものにせらる。寺に傳へて岡基宮腰瓦といふは信すべからざるも、或は舒明天皇の皇宮たりし岡本宮の舊地より發掘したるは事實ならんか。今は天女の手法を見るべく、特に天女をのみ寫せり。その手法、玉蟲厨子に描くところの飛天形菩薩と甚だ意味の酷似せるものあり。

像 佛 磚
(藏 寺 山 靈 和 大)

251



第二十六集(磚佛號)



1200601101904

像 佛 磚
(藏 氏 自 健 橋 高)

252



第二十六集(磚佛號)



1200601101904

泥 業 善

253

(藏館物博室帝京東)



第二十六集(磚佛號)

1200601101904

3



1



4



2



第二十六集(磚佛號)



1200601101904

像 佛 磚

255

2

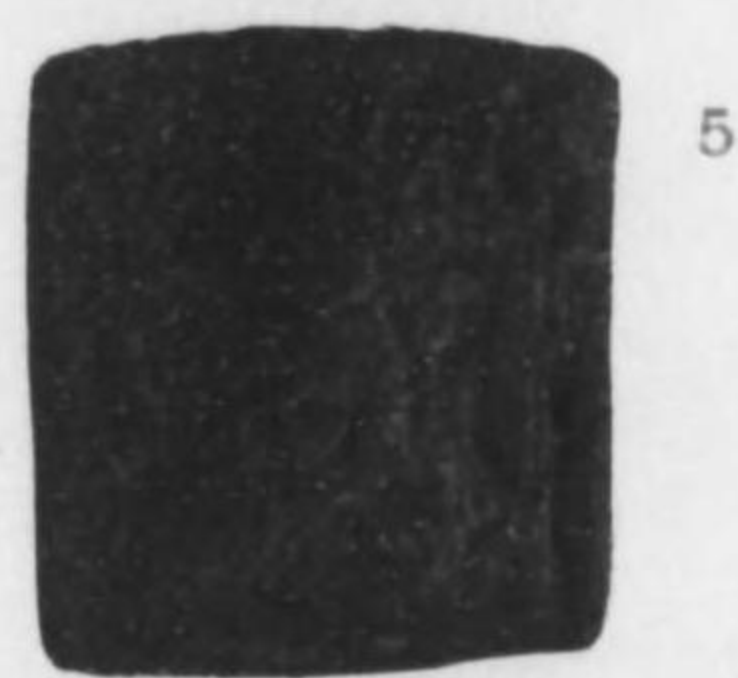


1



第二十六集(磚佛號)

1200601101904



第二十六集(磚佛號)

1200601101904



第二十六集(磚佛號)



1200601101904

像 佛 磚

258



第二十六集(磚佛號)



1200601101904

磚

259



1200601101904

第二十六集(磚佛號)



第二十六集(磚佛號)



1200601101904

終

